

第四十回記念 流山市書道展を無事終えて

私がこの会に作品を出すようになったのは平成二十一年でした。右も左もわからず、戸惑う私に先輩方が優しく声をかけてくれて安心したのを、懐かしく思い出します。

あれから十数年が過ぎ、その間に三十回記念、そして今回の四十回記念展を迎えることができました。会の長い歴史から見れば短い年月かもしれませんが、振り返ると多くの出会いや学びに恵まれた時間でした。この間、社会は大きく変化し、私たちを取り巻く環境も変わりました。また、会を支えてくださった方々のお顔ぶれにも変化がありました。中でも今年、顧問の田村先生がご逝去されたことは、大変寂しく残念な出来事でした。先生は会の歴史を誰よりもよくご存じで、まさに生き字引のような存在でした。折に触れてお聞かせくださったお話からは、この会が多くの先輩方の努力と情熱によって築



ごあいさつ

流山市書人協会 会長 近藤美浦

かれてきたことを学ばせていただきました。ここに改めて感謝申し上げますとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

この長い歴史の中には、数えきれないほどの作品や交流、そして書を通じた友情が育まれてきたことでしょう。その歩みの積み重ねが、今日の会の姿につながっているのだと思います。これからも先人の思いを受け継ぎながら、書道文化に親しみ、学び、楽しめる場として、この会が末永く続いていくことを願っています。そして会員の皆さまとともに、和やかに語り合い、励まし合いながら、次の世代へとこの歩みをつないでいければ幸いです。

四十回記念を迎えるにあたり、これまで会を支えてこられたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。そしてこれからも皆さんと一緒に、書を楽しむ時間を大切に重ねていきたいと思っています。

ごあいさつ

流山市書人協会 顧問 佐々秋露



このたび、第四十回という大きな節目を迎えました流山市書道展が、無事盛会のうちに終了いたしましたこと、心よりお慶び申し上げます。長きにわたり本展を支えてこられた関係者の皆様のご尽力に、深く敬意と感謝を表します。

本展は、書道の普及と発展、さらには豊かな書道文化の継承を目的として歩みを重ねてまいりました。近年は、若い世代からの出展も多く見られ、次代を担う力強い息吹を感じておりますことは、大変喜ばしいことでございます。

一方で、パソコンやインターネットの進歩により、私たちの生活は格段に便利になりましたが、その利便性の中に没頭するあまり、人としての温もりや感性が希薄になりつつあることに一抹の危惧も覚えます。



書に親しむことは、そうした現代社会の中で失われがちな人間味を取り戻す大切な営みであると考えております。

今後も本協会は、地域の大人の方々はもとより、未来を担う子どもたちとも積極的に関わりながら、書の魅力と伝統文化の尊さを広く伝えてまいります。手書き離れが進む時代だからこそ、書道の価値を次世代へと繋いでいくことの重要性を改めて感じております。

結びに、本展のさらなる発展と、皆様のご健勝ご活躍を心より祈念申し上げます。

ごあいさつ

流山市書人協会 顧問 若井畦翠



流山市書道展四十回記念、誠におめでとうございます。

私が流山市書道展に出品させていただいたのは、平成十年の第十二回展からでした。私は埼玉県越谷市の住民なのですが、娘が鯖ヶ崎で書道教室を開いておりましてので、江戸川台の内藤雲山先生の御宅に伺ったのが、流山展との第一歩でした。

流山の気風は明るく自由で、何の抵抗もなく私を流山書人協会の一員として受け入れてくださいました。

雲山先生の後、存在感のある田村紅華先生、雰囲気のある柔らかな佐々秋露先生、博識の後閑先生、努力家の坂本英山先生、田中玉堂先生は印象に残る先生でした。高橋愛子先生、黒山桂芳先生も実に温かなお人柄でした。会で得た人との交流は豊かであり、私の宝です。



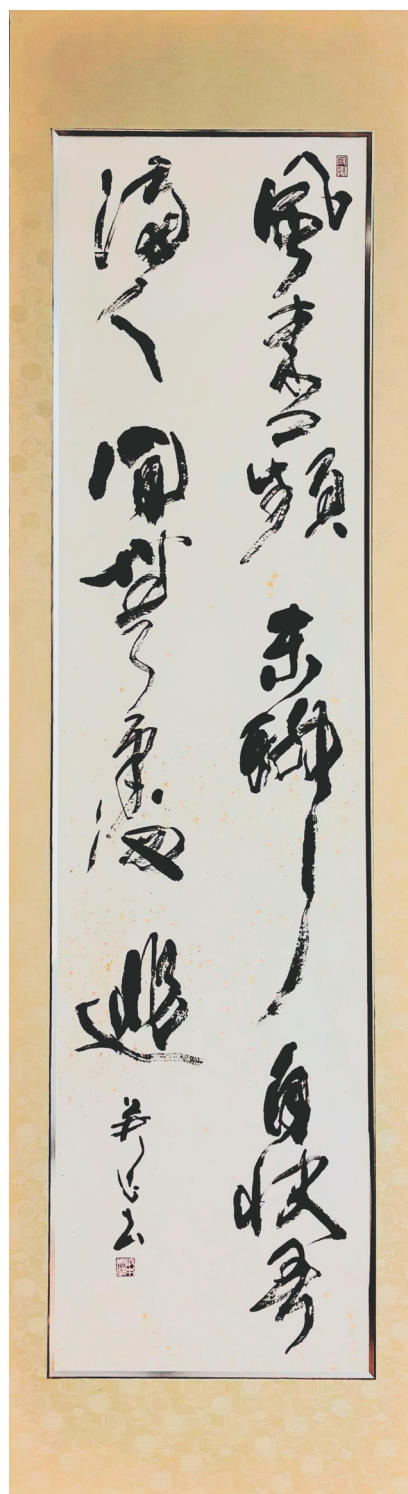
作品に向き合い、書と格闘したという記憶よりも、先生方との出会いが楽しく、深く心に残っています。鬼籍に入られた先生方もおられますが、先人の足跡、その影響は、今も会員の皆様の中に生き続けていることと思います。

今後も良き伝統を受け継ぎ、育てていってください。多くを得ようと望まず、自分の身の丈に合った練習と努力でいいと思います。そしてそれを続けることです。人と人との関わりの中で心を豊かにしていけたなら、それはとても幸せなことだと思います。

流山に出向く機会は少なくなりましたが、越谷から流山書人協会のご発展を見守り、応援しております。

ご挨拶

流山市書人協会 顧問 坂本 英山



今回で三度目の記念誌の発行となりました。

振り返れば、今から十五年前の第二十五回書道展の時間が最初でした。この時に仲間たち（書人協会）の記録を「後世に残しておきたい」との気持ちで作りました。

その表紙の絵は、当時、常任理事の田中玉堂先生に描いていただきました。先生はとても気さくな人柄で誰からも信頼されていました。中でも当時の会長を務めた田村先生から頼りにされていたと記憶しています。（残念ですが田村先生は今年の二月に永眠されました）

二度目は第三十回書道展を記念して発行されました。それぞれの記念誌には、当時の仲間たちの作品が記録されており、いまもページを開くたびに仲間の顔が懐かしく浮かんできます。

私が理事の仲間に加わったのは三十年前の第十回書道展のころでした。

当時の会場は、今の文化会館の三階にある部屋で、倉庫がある一階から外階段を利用して展示パネルを一枚一枚、三階まで運んでいました。今、思えば大変な重労働だった想い出です。いつの時も書道展の開催には、うれしいこと、つらいことがあります。地域の皆さんに喜んで頂ける素晴らしい作品展を目指していただければと思います。

さて、今回は第四十回書道展を記念しての発行になりますが、この記念誌が書人協会にとっての節目の大切な行事の記録として十年、二十年先の後世の礎になることを願っています。